



三 たぬき天狗の登場？

「先輩、どこですか」不安になって、大声を出す。でも、返事はない。

「せんぱーい」声を枯らすぐらいな声で叫んでみた。だが、やはり返事はない。いや、あった。

「せんぱーい」「せんぱーい」「せんぱーい」自分の声のこだまだ。こだまを聴くと自分が一人だけこの山の中に取り残されたような気になる。

「ふう。仕方がない」直人は目の前の平べったい石の上に座りこんだ。ジャージの汗が肌にべったりと引着く。冷たい。そして、気持ちが悪い。

「はあ、はあ、はあ」学校から峰山に走って来た荒木と直人。平坦な道から登り坂に変わる。左手に市民病院が、右側に墓地が見えた。その先に三階建の建物が見えてきた。老人ホームだ。ゆりかごから墓場まで。人の生きざまから死にざまを全てつなぐ三点セットがここにはある。

「ここから山道に入るぞ」荒木が老人ホームの敷地の中に入って行く。

「勝手に入ってもいいんですか？」

「勝手じゃないぞ。ほら、あの看板を見てみろ」看板にはハイキングを利用される方は、敷地の中をお通りください、と書いてあった。

「ここは、昔、山の尾根沿いにハイキングコースがあったんだけど、老人ホームが建ったので、道が途切れてしまったんだ。だから、老人ホーム側が歩く人のために中を通ることを認めてくれているんだ。

体もほぐれてきたから、さあ行くぞ」荒木が急こう配の狭い山道を早足で登り始めた。直人は平坦な道でも、息を切らしながらやっと荒木について来たのに、山道なんか着いて行けない。

それでも、知らない場所に一人で置いてきぼりにされるのは困るので、必死で着いていく。道は歩きやすい。何人も人が通っているからだ。周囲は木々に囲まれ周りが見えない。だから、自分がどこを登っているのか、どこがゴールなのかわからない。先の見えない不安は体力を必要以上に消耗させる。岩場に出た。ふと、目の前が開けた。たいして登っていないと思われるのに、市街地が見えた。

普段は街の中でうごめいているので、上からみる景色は新鮮だ。学校の校舎が見えた。ここからはずいぶんと遠く離れて見える。逆に言えば、こんな遠くまで走って来たんだ。俺ってすごいな。そう思うと急に元気が出た。だが、直人が風景に見とれているうちに、荒木の後姿は山の中に消えた。

「先輩、どこですか」四方に向かって大声を上げる。

「ここだ。ここだ」頭の上の方の木々の間から、荒木のカモシカのような足が見えた。

「ここから十分も登れば、展望台に着くからな。先に行って待っているぞ」

「ちよ、ちよっと、待ってください。先輩。僕、道がわからないんですけど」慌てる直人。

「道なりに登ったらいい。分かれ道に出会ったら、下りじゃなく、登りを選べ。楽な方じゃなく、しんどい方を、きつい方を選べ。楽をしたらろくなことはないぞ。そのまま上に登り続けたら、展望台に着くからな。じゃあな」

荒木の姿も声も消えた。すごいスピードだ。とてもじゃないけれど、初めての自分にはついてい

けそうにない。それこそ、心臓がバクバクで胸を突き破りそうだ。筋肉もいつ遮断機が降りて切れるのかわからない。直人はさっき通った道のことを思い出した。

練習コースのすぐ側に病院や墓地があるなんて洒落にならない。生きざまじゃなく死にざまを見せつけられているような気がする。急いで頭を振る。入学してすぐに、こんな山の中で死ぬわけにはいかない。直人は思い直して、荒木が通ったと思われる山道を登っていく。本当にこの道だろうか。不安がよぎる。不安は直人に元来た道に戻れとつぶやく。だが、今さら、スタート地点には戻れない。ゴールには荒木先輩が待っているのだ。それに、このまま下りて行っても、元の場所に戻れる自信はない。山の中はどこを見ても初めて見たような景色だし、さっきも見たような景色だからだ。自分の立ち位置がわからない。よけいに不安が増す。

ええい。とにかく、上に登るんだ。荒木先輩は道に迷ったら、しんどい方を、きつい方を選べと言っていた。楽をするなど言っていた。それに、目の前の山道はやぶには覆われていない。人が通れる、人が通ったちゃんとした山道だ。でも、初めて山の中に入った直人にとって、何がちゃんとしているのかはわからない。

息が荒くなる。普段、こんな息をしていたら、恐がって誰も近づいて来ないだろう。満員電車ならば座っている人も立ち上がって席を譲ってくれるだろう。それとも、電車の窓側に押し付けられる、身動きができないようにされるか、どっちかだろう。また、山道の傾斜がきついのと筋力が落ちてきているせいか足が上がらない。ずり足で進む。だが、それでは前に進まない。摩擦が大きいのと進む一歩が足の大きさの半歩なのだ。それでも、後ろに下がらないだけでもまだ。

目の前に四、五十センチの段差が現れた。岩だ。ほぼ直角に剥き出している。一瞬、躊躇する。足を大きく持ち上げ、岩の上に置く。足を乗せたものの、体のバランスが悪いのか足に力が入らない。体は上がらない。ちょうど目の前に木の枝があった。登れない者は枝にでもすがれ。枝を掴んで無理にでも体を引き上げようとする。

ポキ。その時、枝が折れた。あーあ。頭が分度器三十度分後ろに倒れる。やばい。このままじゃ頭を打つ。救急車と病院と墓地の連想ゲーム。を打ち消す。掴めない空気を掴もうと手を前に伸ばす。体は前傾姿勢だ。右手と左手が地面に触れた。四つん這いの姿勢になる。両手は石で擦りむいたものの、なんとか後ろには倒れずに、事なきを得た。

段差を乗り越えると分かれ道にやって来た。右方向が下り。左方向が上りだ。荒木が言ったこと再び思いだす。「しんどい方、きつい方を選べ」でも、つま先は自然と右に向く。だめだ。だめだ。必死で体を左にねじり、登り坂に挑む。

あっ。視線の先が緑から薄い青色に変わった。空が見えたのだ。そして、人の意見には必ず反対する天の邪鬼のような、ごつごつした岩場に出た。さっき見た景色よりも市街地が更に広がっている。高く登ったせいだ。立ち止まったものの、息は荒いままで、顔から汗がしたたり落ちる。少し休もう。直人はできるだけ人の意見には同調するような岩場の上に座りこんだ。

視線の向こうに山が見える。この市のシンボルの屋島だ。名前の通り、屋根の島じゃなく、山だ。あそこならば地面に座っても痛くないのかも知れない。直人は座った岩の上でお尻を少しずらした。

「T高校の新入生か」どこからか声がした。振り向いて見上げる。直人が座りこんだ岩場の上に

天狗じゃなく、たぬきがいた。そのたぬきが腕立て伏せをしていた。それも片手一本で。頭には毛がない。禿げだぬきか。いや、人間だ。たぬきがしゃべる訳がない。「どう、どうしてT高校とわかるんですか」直人は不思議そうな顔でたぬきを見つめる。

「その体操着はT高校のものだろう。それにわしはT高校の教師だ」

たぬきがにやっと笑った。

「教師？」どうみてもただのたぬき、いや、おっさんだ。

「それに、クロススポーツ部の新入部員だろう」

「そうです。それこそ、なんでわかるんですか」

「さっき、荒木が後から新入部員が上って来ると言っていたからな。わしはクロススポーツ部の顧問だ」

たぬきは腕立せ伏せをやめ、今度は岩の上でスクワットをしはじめた。

「こ、顧問ですか」クロススポーツ部は多彩だ。ひまわり娘に、ゴリラに、たぬきだ。まだまだ、たくさんのユニークな人物がいるんだろうな。自分もその一員になるのか。ぶるぶるぶる。頭を振る。頭を止めても体の震えは止まらない。

「さあ、休んでいる暇はないぞ。頂上で荒木が待っているぞ。さっさと出発しろ。あっはっはっはっ」体は小さいのに、声はでかい。荒木先輩以上だ。

「しゅっぱつしろ」「しゅっぱつしろ」「しゅっぱつしろ」こだまさえも直人を煽る。

「は、はい」直人はたぬきの勢いに負けて、休む間もなく山道を再び登り始めた。

「おっ、着いたのか。どうだ。気持ちいいだろう」

展望台の階段を上がりきると荒木の背中が見えた。荒木先輩は振り向かずとも足音だけで直人が来たことがわかったのだ。

「は、はい」と答えたものの、はあはあはあはあと荒い息で声が続かない。体は前かがみになり膝に手をついているので、景色も見えない。ようやく息は落ち付き、顔を上げた。目の前にはレゴブロックを積み重ねたような市街地が広がり、海には島と船が張り付いていた。夕陽が海を、街を赤く染めている。第三者から見れば、直人たちも赤く彩られているのだろう。きれいだ。素直にそう思えた。さっき岩場で見た時よりも街全体が大きく見渡せる。

「あれが俺たちの高校だ」荒木先輩が指差した。かなり遠い。そして高校の校舎もレゴブロックを積み重ねたように見える。あそこで普段、千人以上の学生たちが勉強しているようには見えない。

「ここまで登ったんですね」荒い息の隙間からやっと言葉が出た。

「そうだ。すごいだろう。これが山登りの醍醐味だ。人間は同じ距離でも水平よりも高さの方がすごく離れていると思うんだ。この頂上はたかだか二百メートルだけど、高く感じるだろう」足下を見る。展望台の下には崖が見える。大げさだけど吸い込まれそうだ。

「まあ、こんなものかな。今日はこのへんにしといてやる。さあ、帰るぞ」帰りは、荒木先輩と並んで、アスファルト道を走る。帰る途中、山の魅力について、荒木先輩は熱く語った。たかだか一歳しかちがわないのに、考えていることは千メートルの山の高さほど違う。直人はしばらくはこのクラブにとどまっていようと心に決めた。

「ちわー」直人は今日も部室を訪れた。先輩の荒木と一緒に初めて山を駆けのぼって以来、毎日のように山の中を走っている。自分でもわからないけれど、何かに取り憑かれたかのようだ。

「そりゃあ、天狗になりかかっている証拠だ」顧問のたぬき、じゃなく岡田先生が言う。直人が初めて練習で山の中を走った時に、岩場で腕立て伏せをしていた先生だ。専門は日本史だ。

「天狗？ですか」

「そうだ。昔から、山や岩場は修験者達の修業の場だったんだ。それに、あの山には前方後円墳などの古墳が多いからなあ。ある意味、神聖な場所だったんだ。江戸時代には、殿さまの修業をした滝もあるぞ」

「それと、天狗とどういう関係があるんですか」

「人は何で修業するんだ」

「そりゃあ、できないことをできるようになるためです」

「そうだ。人は山の中を走るなどの修業で、自分の限界以上の能力を身につけることができると考えたんだ。その到達点が天狗だ」

確かに、岡田先生の言う通りだ。今も、荒木先輩と一緒に山の中で練習しているが、スタートしてすぐに荒木先輩の姿は消える。すごいスピードで山を駆け登っていく。登りだけでない。下りでも、直人がすべらないように足を出しているうちに、荒木先輩は足を小刻みに動かしながら、あっという間に下っていく。まさに、天狗だ。直人も荒木先輩のように早くなりたい。だから、ついて行く。

でも、天狗になるための修業をしている気持ちはない。それに、荒木先輩の顔を見ると天狗と言うよりもゴリラだ。それなら、自分はゴリラになるために修業をしているのか。ぶるぶるぶる。頭を振って、急いでその考えを打ち消す。

「どうだ。勉強になるだろう。この部はスポーツしながら歴史も学べるんじゃ。直人も天狗を目指せよ。はっはっはっはっ」

この先生はいつも話の最後に笑う。直人も思わず続いて「天狗ですか？はっはっはっはっ」と笑ってしまう。笑いは伝染するものなのだ。確かに勉強になる。